

副田道夫氏

私を最初に店づくり、設計にのめり込ませたのは、竹中工務店設計課長だった副田道夫氏である。一九五七年、日本で初めてのアメリカンスタイルのフア

私の履歴書

一 匡 頭 江
いち きょう ぎら がし え

25

ミリー向けレストランを福岡市・新天町商店街に開いたときに設計と建築をお願いしたのがきっかけだった。
出店する前のこと。市内の渡辺通りにある九電（九州電力）ビルの工事現場付近を歩いてみると、竹中家十四代当主の竹中藤右衛門氏が、八十を超えたお

年で完成間際のビルをチェックに回る姿にぶつかった。ある場所に来たとき、突然、壁の出来具合が悪いと言って、持っているステッキを何度もたたきつけ、壁を全部やり直すよう指示されたのだ。その一部始終を見ていた私は、竹中は職人の会社だと思い、ほれ込んだ。

早速、福岡支店長の飯田栄一氏に「ぜひ今度、新天町につくるレストランをお願いしたい」

店舗設計で二人三脚

深夜までの議論 しばしば

と掛け合った。すると、「うちが過去にレストラン建築をしたのは、小林一三氏との関係で阪急の店だけ。今後も飲食店をやることがはないでしょう」と言う。そこを何とかと日参し、やっと引き受けていただいた。

き合いが深まっていった。今まで本社や工場、店舗と合わせて五百件以上の設計が副田氏との共同作業。建築の四〇％近くも竹中にお願ひしてきた。私の自宅やお墓までそうだ。工事の支払いが一年ぐらい先というのもしばしばで、竹中錬一社長がほほ笑みながら、「また立て替え工務店ですか」と言われていたのも懐かしい思い出。副田氏とは、侃々諤々（かん

かんがくがく）のやりとりをしながら、深夜の二時、三時に及ぶまで作業を続けることもあった。柱の位置、腰壁の高さ、家具のおさまり具合まで、センチの単位で調整する。私がイメージしたものを副田氏が図面に起こす。その間は私が鉛筆を削る、という二人三脚の設計は、同氏が九三年に亡くなるまで、三十六年間続いた。ロイヤルと三井物産との合併

会社「物産ロイヤル」が七三年に、三井物産の肝いりで東京・原宿のパレフランスビルにレストラン、カルダン・ロイヤルを出店することになった。そこで副田氏らとパリに行き、カルダン氏が経営するレストランを訪れた。だが、私のイメージでは



73年、設計家の副田道夫氏(左端)らと(副田氏の隣が筆者)

・ホテルに向かった。そのロビーのシャンデリアはまさにイメージにぴったりの。早速、ホテルの設計者、ミノル・ヤマザキ氏に許しを得、シャンデリアをテーマにカフェをつくった。コーヒー代の相場が百円前後だったころ、一杯五百円。だが、

ない。そこでカルダン氏のデザインではない我々の店をつくるということになり、引き続きスペイン、ポルトガル、そして南米にまで足を延ばし、イメージに合うレストランを探した。なかなか見つからず意気消沈していた我々は、最後にロサンゼルスにセントチャーリー・プラザ

店内のしゃれた雰囲気や食器、インテリアが受け取った。物産ロイヤルは七七年に合併を解消したが、カフェは繁盛しながら九四年まで営業を続けた。こうした伝統を受け継ぎ、ロイヤルには、外食企業では珍しい設計・建築室がある。そして新たに店を出すときは設計から厨房(ちゅうぼう)、調度品、植木一本に至るまで、室員たちと議論しながら目を通し、チェックするようにしている。店づくりではいろいろなか「だわり」が必要だ。そのすべては「お客に喜ばれるために」という一点に集約されている。(ロイヤル創業者取締役)